

川崎陸送

インド定温倉庫で流通加工

付加価値野菜の販売開始

川崎陸送(本社・東京都港区、樋口恵一社長)ではインド西ベンガル州コルカタ市郊外の定温倉庫で流通加工を本格展開

加工を目的としたソーラー発電・蓄電式の小型定温倉庫となっている。

タイやベトナムで行われている、バナナの葉を用いた脱プラスチックパッケージの取り組みをインドでも実施し、コルカタ市内の大手スーパーで販売を開始。7月27日の初日から通常の野菜より5割高い価格設定でありながら売れ行きは好調で、「農家からスーパーまで付加価値野菜の小さなサプライチェーンが構築できた」(樋口社長)としている。

インドは世界一のバナナの生産量を誇り、定温倉庫の近隣でもバナナを栽培している。タイやベトナムでプラスチックごみ削減のため、バナナの葉を食品包装に用いていることをヒントにし、インドで同様な取り組みにトライアル。近隣のバナナ農園から葉を調達し、定温倉庫内

同社では1月にインド西ベンガル州コルカタ市郊外のシングール村で定温倉庫が完成。JICA(国際協力機構)の支援と西ベンガル州政府の協力により建設されたもので、同社が日本で得意とする定温管理やソーラー自家発電のノウハウを活か

で野菜を包みパッケージ化。コルカタ市内の大手スーパー「Big Bazaar」の2店舗でPOPで飾りつけたコーナーを設け、発売を始めた。

初日は午前10時の開店から午後9時半の閉店までにはほとんどが売れた。27～31日の5日間に販売した野菜は12種類で、樋口社長は、「割引なしに、逆に5割高い価格で売れたのは、流通加工で付加価値をつけたことによるもの。自分が勉強してきたロジステイクスをベースにバリューチェーンを組み立て、検証してみたいという思いがある」と話している。



バナナの皮で野菜をパッケージ



定温倉庫での流通加工